

【347】

氏 名 (本籍)	あま がわ とよ こ 天 川 豊 子 (群 馬 県)		
学 位 の 種 類	博 士 (言 語 学)		
学 位 記 番 号	博 乙 第 2093 号		
学位授与年月日	平成 17 年 2 月 28 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当		
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科		
学 位 論 文 題 目	A Construction Grammar Approach to Light Verbs in English (英語の輕動詞に関する構文文法的研究)		
主 査	筑波大学教授	文学博士	廣 瀬 幸 生
副 査	筑波大学教授	文学博士	藤 原 保 明
副 査	筑波大学教授	博士 (文学)	山 田 宣 夫
副 査	筑波大学助教授		加 賀 信 広
副 査	筑波大学助教授	Ph. D.	竹 沢 幸 一

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、英語における have, take, give, do, make など意味が比較的軽い「軽動詞」(light verb)と呼ばれる動詞を取り上げ、それらが一定の構文で果たす意味機能について、構文文法的観点から考察したものである。本論文が扱う軽動詞構文は、軽動詞の目的語により三種類に分けられる。第一は、目的語に不定冠詞の a と動詞の不定形と同形の V をとる、have a + V(*have a walk*), take a + V(*take a look at the picture*), give NP a + V(*give the car a push*), give a + V(*give a smile*) という構文である。第二は、目的語として動詞から派生した名詞をとる、do + NP(*do a translation*), make + NP(*make a choice*) という構文であり、そして第三は、do が派生名詞ではなく具象名詞 (*do the dishes*) や抽象名詞 (*do economics*) をとる構文である。従来、軽動詞は構文の実質的な意味解釈には貢献していないとする見方が優勢であったが、本論文は、軽動詞構文の構文全体としての意味とそのなかで果たす軽動詞自体の意味を特定することによって、軽動詞が重要な役割を担っていることを明らかにする。

本論文は九章からなる。第 1 章で論文全体の概要を説明した後、第 2 章では軽動詞構文を扱った先行研究を詳しく検討し、その問題点および不十分な点が指摘される。

第 3 章では、a + V の構文的意味と V に生じる動詞のタイプを特定する。まず、a + V は慣用的で特定の構文に張り付いたものではなく、「アスペクト的に制限のある行為」を表すということが示される。さらに、a + V に相当する日本語表現「ひと + V」(「ひと泳ぎ」)と「いち + v」(「一考」)を考察し、それらが英語の a + V と同様の意味を担い、同じタイプの動詞を選択するということも論じられる。

第 4 章では、最初に have a + V 構文の構文的意味を検討する。この構文の意味は、目的語 a + V のアスペクト的特徴を反映し、「V の表す行為を少しの間行う」ということである。次に、この構文に生起する動詞のタイプを特定するうえで、軽動詞 have の役割を考察する。have は一般に所有関係を表す状態動詞であることから、have a + V 構文に現れる動詞は行為者に内在的で外的目標をもたない行為を表すものであると主張する。

第5章では、take a + V構文の構文的意味を検討し、この構文における軽動詞 take の役割を考察する。この構文の意味は have a + V構文と同じく、「Vの表す行為を少しの間行う」ということである。take はさまざまな意味をもつが、それらが目的語の移動という観点から二つのタイプに分類されること、およびこのさまざまな意味にはコアとなる意味を設定できるという事実を指摘し、これらの特徴がこの構文に生起する動詞のタイプを決定するうえで重要な役割を果たしていることが論じられる。さらに、この構文と have a + V構文との間に見られる含意の違いも明示される。

第6章では、give NP a + V, give a + V および許可を表す give 構文 (*give Bill a kick at the ball*) を扱い、それぞれの構文的特徴を考察するとともに、各構文で果たす give の役割を明らかにする。まず、give NP a + V構文の意味は「NPに対してVの表す行為を少しの間行う」ということである。この構文では、行為がそれを行う行為者から独立した対象に向けられていることから、Vに生じる動詞はこの特徴をもつ行為を表すものに限定される。次に、give a + V構文の意味は「Vの表す行為を少しの間行う」ということである。この構文が間接目的語をとらないこと、および give の主語は意思をもった実体であることから、Vに生じる動詞は行為の受け手を要求しないものであり、かつ、意思をもたない実体は主語からは排除される。最後に、許可を表す give 構文の意味は「主語が許可を与え、間接目的語が少しの間Vの表す行為を行う」ということである。このことから、Vに生じる動詞は、間接目的語にとっては自ら欲する行為であり、かつ、主語にとっては相手の求めに同意できる行為を表すものでなければならない。

第7章では、do + NP構文の構文的意味を考察し、この構文に許される派生名詞のタイプの特定、および具象名詞や抽象名詞が生じた場合の do の解釈を決定するうえでの軽動詞 do の役割を検討する。まず、この構文の do は主語に Jackendoff (1990) のいう意味での「行為者」(Actor) をとり、さらに、この do は具体的な内容を指定しない行為そのものを表す動詞であることを指摘する。この二つの意味的特徴は、この構文に生じる派生名詞を特定する機能を果たす。つまり、派生名詞の元の動詞は行為者を取り、派生名詞自体は行為を表すものでなければならない。さらに、具象名詞や抽象名詞が生じた場合の do の解釈は、行為者がかかわる解釈に限られる。最後に、この英語の構文と関連して、日本語の「する」を軽動詞としてとる「ひと + Vする」(「ひと泳ぎする」) や「いち + Vする」(「一考する」) という構文を考察し、日本語においても英語と同様な特徴が見られることを論じている。

第8章では、make + NP構文に関してその構文的意味とともに軽動詞 make の役割を検討し、この構文に生起できる派生名詞のタイプを特定する。この構文では、動詞 make は主語が有生無生を問わず制御可能な行為を表し、かつ目的語はその行為の結果生じたものであるという特徴をもつ。このことから、この構文に現れる派生名詞は元の動詞が make と同じ制御可能な行為を表すものであり、派生名詞自体は行為の結果を表すものに限られるということになる。

第9章は結論で、本論文の主張を簡潔にまとめている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、英語の主な軽動詞とそれがとる一定の構文に関して豊富なデータをもとに詳細に分析したものである。軽動詞構文に関する従来の研究では、軽動詞は時制と人称を表すだけで構文の意味解釈には実質的貢献をしないとする見方が優勢であり、それが軽動詞と呼ばれる所以でもあった。本論文の最大の意義は、軽動詞構文の構文全体としての意味とそのなかで果たす軽動詞自体の意味を特定することによって、軽動詞がその名にもかかわらず重要な役割を担っているということを明らかにした点にある。

より具体的な成果としては、次の四点があげられる。第一に、have, take, give が a + V という形式の目的語をとる場合、それぞれの構文全体としての意味、a + V に固有の意味、そして各構文における軽動詞自

体の意味を突きとめることによって、それらの相互作用から a + V の V に生じる動詞のタイプを明らかにした。第二に、英語の a + V と日本語の「ひと + V」・「いち + V」には共通の構文的特徴が見られることを論証したこと。第三に、do と make が派生名詞をとる場合、これらの動詞のもつ一定の特性が派生名詞の選択に課せられることを指摘したこと。第四に、do が具象名詞や抽象名詞を目的語にとる場合、その解釈が文脈からの推論によって決定されるということを明らかにしたこと。いずれの点も、それぞれの構文に関する先行研究の問題点を指摘したうえで、新たな興味深い例を発掘し、その緻密な検討を通して実証的に示されているものである。したがって本論文は、この分野の研究に対して実質的な貢献をするものと高く評価することができる。

ただし本論文には、記述的および理論的に不十分な点も残されている。記述的には、軽動詞が a + V でなく、不可算形を目的語にとる場合 (have respect for, take care of, give rise to など) や軽動詞の一つと思われる get の例が考察されていないということがある。理論的には、本論文によって立つ構文文法のわく組みにおいて、軽動詞構文がどのような理論的意味合いをもつかが十分に論じられていないということがある。これらの点に関してしかるべき考察を加えれば、本論文はさらに完成度が高まることが期待される。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。